

悪いところはさつさと取つてもらおうと臨んだ手術

入院は、高校生の時の盲腸と出産と十年ほど前の急性胃腸炎のとき以来。

今度の入院がいちばん深刻。なにせ「がん」である。あの！十人が十人恐怖だと口にする「がん」の手術である。これを深刻といわず何といおう。

後でいろんな人の話を聞くと、こういうときには「なんで私が」とか「手術以外の方法はないのか」とか「何かの間違いでは」などと、慌てたりうろたえたり騒いだりするらしい。しかし、私は比較的冷静であつた。日頃、がんは早く対処すれば怖くないといったテーマであちこちで講演をする身である。これくらいのことでの、そう、私は本気でそう考えた。これくらいの初期の乳がんごときで、あたふたしてたまるかと。それは今考えると私の美学であつたように思う。

また、もうひとつは退院当日に控えていたり仕事が気になつた。私のようにフリーで動いている人間は、仕事に穴をあけたりキャンセルしたりなどというのは、よほどのことがないとできない。信頼を損ない、もう一度と仕事がこない可能性もあるからだ。こういった気持ちはその立場にないとわからないかも知れないが、とにかくこれしきのことではないがしろにはできない仕事である。絶対に！這つてでも行かなくてはならない。その緊張感はもしかしたら手術そのものより大きかつたかもしれない。

せつかく六日間も入院しているのだからゆつくりしよう思い、気張って個室にしてしまった。確かに気楽である。まず朝早く麻酔医が来て、あれこれ説明していく。意外にもまだ若い女性であつた。麻酔医というのは本来手術になくてはならない存在だ

目覚めたら手術は終わっていた。主治医の見慣れた顔が目の前にあって「終わりましたよ、無事終わりましたからね」とにこやかにほほ笑んでいる。あとで聞いたところでは、一時間半くらいの手術だつたらしいが、目覚めてもさしたる違和感もなく、気分は悪くない。

再びストレッチャーで病室へ移動。彼と母親が待っていた。私は身動きできず。顔には酸素マスク、尿道にはカテーテル、胸

情や声かけをしてくれ、すいぶん感心した。またひとり男性ナースがいて、ああ、ここにも男性ナースがいるんだなあと時代の流れを感じたりした。余裕である。

麻酔薬を入れながら「数をかぞえてください」といわれ、そのとおりにする。1、2、3……本当にここまでしか覚えていない。あとは夢の中である。すごいな、麻酔つて。

が、小さなところだと専門でない人が兼ねていたり、麻酔医自身兼業であちこちの病院を掛け持ちしていたりすることもある。病院選びのポイントとして、麻酔医が常勤であることも実は外せない。

次に前日飲んだ下剤の効果を確認し、ナースが血管確保をする。

著書の平山鉄太郎氏は、プロの校正・校閲者である。同じ校正者であつたこと、同世代であつたこと、そして沖縄に興味があるという共通点があつたため数年前に知り合つた。当時から「沖縄本」コレクターで、コレクターというかマニアで、もう傍目にもどうしようもない感じだった彼が、マニア高じてとうとう本まで出してしまつた。しかも、彼の熱愛する沖縄地元出版社から。

タイトルから沖縄にまつわる書籍の紹介本みたいなものかなと思えば、さにあらず。いや書籍の紹介も出てくるものの、軸となつてるのは、沖縄を知るために書籍を集め始め



沖縄本札替

▶「本をつなぐ」原稿募集中！  
その本を知ったきっかけを入れて、  
めのコメントを六百字程度でまとめて  
会社ゆいばおと（表面参照）までお  
ださい（メール、ファクシミリ、郵  
け付けます）。採用の方には記念品を  
ています。

には排液用のドレーンが留置されている。胸部全体が重たい気がするが、手術したのだからこれは仕方がない。ああ、終わつたんだなあという安堵感に包まれる。実は終わるどころか、その後の悪夢のような一年間のほんの始まりであつたのだが……。知らぬが仏はこのこと。これで仕事も行けそうだな、キャンセルしなくて良かったなと、そんなことまで早くも思つていた。

編集後記

一ヶ月遅れで発行できた3号はいかがでしたでしょうか。

二十代で初めてパリを訪れたとき、映画に出てくるような街の景色に感動し、何百年も前から建ちつづける建物の間を歩き回りました。そして、古いものが大切にされている心地よさを思う存分味わいました。

今、してみたいことがあります。日本の少なくなってしまった里山を歩くことです。「生物多样性」と出会ったことで、自然と共に生してきたご先祖さまを読らしく思えるようになりました。

子どものころ、暮らしのなかに自然がとけこんでいた時代を生きた方々は、戦争を体験した世代と重なります。昭和を生き抜いた方々から学ぶことが、またひとつ増えました。（山）

「ゆいぽよと」バックインバーのお知らせ

創刊号インタビュー／横幕直紀さん（「ずっとそばにいるよ」著者）

「ありがとう」を伝えたい！  
2号 インタビュー／斎藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）

「きのこ会

校正者

藤井晶子

たはずが、いつの間にか集めることが目的となってしまった（膨大なコレクションの多くは未読である）コレクターが、いかに自分が沖縄を愛し、沖縄本を愛し、どのように沖縄の古書店や人々と付き合いながら収集し、どのように家の床面積を本が狭くしていき、妻にその言い訳をしているのかを軽妙に楽しく書き綴った、沖縄と本と収集癖（！）にまつわるエッセイ集である。

沖縄関連の本が欲しいあまり、「ゼンリン住宅地図」の沖縄地図まで買ってしまったくだりには（まさかそこまで……）といささか呆れる反面、そんなものにまで運命の出会いをしてしまう彼の沖縄本愛の強さにちょっと感動してしまったりして。

とにかく、もう書くのが嬉しくてたまらないという気持ちが文章のすべてから感じられる。沖縄に興味のある人も、古書収集に興味のある人も、そしてジャンル問わずすべての「コレクター」たちが著者に共感し、友情を感じられるに違いない一冊。